載恩記 上

316
61

伊地知文庫
文庫20
320
1

戴恩記序

伊地知氏書冊

昔稱民生於三事之如一父生之君食之師教之故聖人者必有師師者所以傳道授業解惑也嗟乎師道之不傳也久矣欲人之無惑也難矣蓋聖益聖愚益愚者皆出於此乎蒲衣八歲而大舜師之項橐七歲爲孔子師故弟子不必不

如師師不必賢於弟子術業有專攻者
雖聖人亦師之不以為恥況於衆人乎
今之衆人其去聖人也亦遠矣而恥學
於師惑矣故曰務學不如務求師師者
人之模範也模不模範不範為不仆矣
又曰一卷之書必立之師嗚呼師哉師
哉侯芭從楊雄受太玄法言雄卒芭為

起墳喪之三年陳無已為曾南豐作妾
薄命而不更他師然則師恩侔于君父
夫子之喪顏淵若喪子而無服喪子路
亦然仲尼既葬弟子皆家于墓行心喪
禮三年喪畢或去或留夫師道振古如
茲其恩義可忘乎維余乃祖戴恩記之
所以為作也 孫寸雲子昌易謹序

戴恩記上

一やまと辛崎の松ぞ千とせをへぬる。ゆ
ゑに、ものゝ上手とぞ、ほめられける。
ものゝ上手とは、何の道にもあれ、
ものさとりしたる人を、ものゝ上手
なりとぞ、いふめる。されば、歌
もかうのまなびぶくよりはじまれり
とは、秀吉、はじめ、御子、或は、ひとくち、
或は、三ツ、数、もしくは、百ツ、千ツ、

京都帝国大学

小一首ありとぞ。春宵とんりけのよしてきや
を春宵としてよまるべきよしあり。はるとも
とらばまず師傳よる
一和の云師道とあるを師傳としてまを
ずしきと思ふべきあるとそれはおろかなる
ありぞ。是よまるあれわり。一よいわいい舞
鶴をしのやうにおもしろくすの
よあるべしとしるべきよしをいはんの
ふといふなり。一よいと古代寸伝とろわるよ

師道はかんとさうよりわりてしいつもぞ山鶴い
つまりてこふあるべしおぶ集とあるよあるさ
まをひきとつるものとぶ人丸とそれ石
川乃あるもわつる人ばうとあるとそわ。
鶴間はあ鶴よりあるひ後水尾基後しら傳受
あるとあ傳あ稲とそあとあるまよ乃道（三十）
あ家のしよ程よりつるわるこ自解
仏家ふとろへまあるそ。つあ家ふ小野小所
ぶ古乃衣道姫九伝ありとあまてわ寸ま

師弟のあさよいわ〳〵ひ今も人々の中に
わすれ難と無量法師ハ〇よのくまひろ。
又き紙よりおもうよ師函のとい和尚のかも也。
わるるやうとと七ちゝ御ぢうをれと下照姫の
うきあひ〻ちあよ異事と云ものしとわ。
光又ゆきありさやうみちさハ一切のまみる
を抱しわかりわ一たと師函のといふ
き縁ものやうよるくよろんをれとを
お伝をきれ法るすわうと師函のを

わふて師函ひるをもしかはよ文
ひとゝ家とゝかぶと毋紙の紙といふよ
れものゝ家ハ郷ヲ大概乃間よ大るの概紙わ
ふ和なわ又ハ紙ハ天ゝよ母ニ父母とゝうう
場ものゝ天子て天ゝ父母ちるりまふよあるゝ。
父母れりまをゝも。ものゝ人君よあれた程
われかゝゝ云るもゝ和ヲうゝ師函おもゝ
乃ちよ智りて師函ひるをもしかはよ文
師函のといふ山三紙ハおろけの人よ

八代ゝ
一所侍ふ人の子
を奉とゝ旬日も知と雖ども
とゝまりて極りとつ
ゝ而ゝとゝねとゝ
開合とて知ゝとゝ
の相乃事とゝ
御宮めとて関典とは長言外典といふ
よゝむるわゝまて子

家法の家の表流日月のえとあゝそ
とゝ天下かゝ
ゝるゝ初乃事
子とのそゝ
ゝ義云ゝ
行ゝ
や若桃天王
暗室ふゝ
よゝゝゝ

しゆうとめたのぶ母とおもひて投老孤独の
庭よりの投礼をなして宮ゐて天帝に奏聞と
為師と云ふ事あり。本福寺の開山
九条殿と庭訓めく給法わりゝ心をも
なりゝ

一父母おもひ天地師君は日月と云ふ法大師
は紀州の人と云ふ。実は天地ありても日月
なしと云ふ。そもそもなる不。そこく父
母いうわるとて師云ふ事面とも今

面うつして安穏よ国土をもとめ元乃は悪
をうつすに白をもふい師乃悪也ぞ新くを見り
義をもちて学をと住ることをもしい元源禅定
殿下細川玄育法師ありぞ外ずつを物留
元ぞ物ず蔵ぞ右相ぞ中院入道殿花鳥
井ぞ紀元殿同家相殿紀也法橋ぞ水宮殿
城勝院授安休法師ありぞ山第寺殿ぞ三
元法殿の法ぞ藏乃ぞ天下ぞ物
ぞく殿ぞ元ぞ乃ぞ元ぞこの外ぞ

一人のほうこうしゅうの人ども、親鸞聖人の御前にまいりあつまりて、
おのおのとのたまいしまうけたまわりおもむきを、
おのおのの人どもの、ことばをもってもうしいでられしに、
御弟子ありて、ものもうしたるとおぼえたり。
なにごとのおわしますぞ、事相違せばこそ師匠の仰せ
をもこうむりたまわらめ、専修念仏の法門、
ただ一つにてこそおわしまさめ、
せめてのことわりにもあるべき。

されば、親鸞の御法
とおぼしめしたる人もおわしまさば、
下野の国か、常陸か、信濃か、武蔵か、
うけたまわられかし。
ともとしたがいまいらせんずるなり。
そもそも法義の相違、
師匠の仰せ、
なにごとにつけてか、
命をかえりみるべき。

智惠をれと父孫唱合と世にゆきて人なるよ
ちゝ父孫なりゝ武九五絶めてゝ孫と面
祈ひ結ゝりゝ父孫ゝ中ゝ
ゆゝて世ハ師の教ゝ中ゝ人ゝよゝ人ゝちゝ
冥加と申ゝ上ゝ一疑ゝて世ゝ中ゝ
作りゝ法ゝ妙ゝ法ゝ蓮ゝ華ゝ経ゝ
ゝ者ゝ紀ゝ作ゝ
とゝ上ゝ一ゝ
なゝ

一ゝ師ゝ人ゝ人ゝ
字ゝ師ゝ
しゝ
らゝ
師ゝ
ゝ師ゝ
と光ゝ
ゝ一切ゝ
て師ゝ

まわりまいぞくれんとそうふ一ぢあるいん
ゆそうくのぞのこまるうまあるんやぢなの
まわりを侍んすめるくぞくそくれ氣とつく勢
ふぢ貴人のんこ一ぢふてて粉のまつもりれう
人よしこりと織ねあくぞうをみ絵ぢゆ子
とんてこぞ糸ちよりかのくと一ぢ人四りう
色さ地ありぞ色ぞ形はぞ美程。
切ぞくこ同縁せく
一ぢ式人秘目 一ぢ
辛巳れよのこ七ぢ 四ぢ

頭のようこやう十七ぢ
官名 一ぢ
四季 一ぢ
年人名れようこやう 一ぢ
九章 一通
灌頂 他記稿 一ぢ
水風清穏寺 一通
作者くぞの四 一ぢ
伊勢物語の四 七ぢ
宴名の四点 七ぢ
かどねのようこやう 一ぢ
百夏れ名月 四ぢ
文神四品 一ぢ
四ケ大り 一ぢ
文儀三神の大り 一ぢ
十二月 一通
百人一首のようこやう 二ぢ
古今 一ぢ

八雲神社の宝　一冊

はかりてとおもはるるかな。

又紙面のまに絵をかきて侍るを見るに。

宣命ならん歟奇特なり。一冊乃ち一冊

ようつもやうよりつたへ侍りぬるとて

ふるき絵とも物語の也。絵奇妙大概よりはるか

ふうんかてあるまし。やうよりのおりよりの

ものとて。大概とうてあるまをとるべし。

人見おはしてすまあるまじ。はしてようこそ

れ申ふるとうれしもしみちをあるかしこ

侍へきまやだたくへ社人乃其神の事也とた

らに絵のこもるの絵記をとるこそふること。

絵をとるわるとも其中をとるべしやうの

おはをはるくへ社ぬるの師匠ありとんかん

下のまやおるこに道長卿ゆるの事

曰ぬ百大法師冷泉為海朝臣よむひてのこと

りくへ九の絵をたるこふとるまりやと侍

をとれへ九の中秘をとりくへ

けつまりとされしより我中はく古今集と見え
なかりし人の人丸なりとも是に异れとは稱
事の人丸也されは此歌墓の人しとやまは為
満紹は間口にわりきと記されしは此大御所也
よしかけまくもかしこき紀のま日光山におゐて
さ御東照権現の御事也されは丸は目のやうなれ
は我とも乃年年ありし人丸ね御とよを定家卿
よあるる事也我等の大儀也儒学丸稱よとひ
給へるはと云りあり人丸まんは事ハ人丸人

あつては一統よは敏達天皇の御末と云り其父
母もなくて石見国にてある人の家のかしは木
の本に童形にて出現ましまして稱歌
の海道と見へたるに仕持統文武之聖朝に遇ひ新
田高市之皇子に仕と云へり續日本紀と見へれは史に
天皇御宇三月十八日に卒すと見へたりよ
云しや之を白う様あすと牧ケ国にも大妻を
おもしろうやうそうきんきさりと云へりは情縁
大和の猿丸の上の歌よ守つくと云そあり情夫也

四石の濱とも云り。亦人丸家の集に
曰。ゑのの國にて今くなりぬへきわかふよめる。
いとゝかなしまけ我とゝもとてひさかたの
神の宮ゐ出よわるゝ我とゝもとぬらす袖つゆ
ゐなんとそゝろの樹とのゝ海邊にて月をみてつゝ
と四條世にてゝ廟あり。いとゝ多井寺の列
いるとゝ云ふ。しかして入彩。海の時絶られ
我が舟より人丸の社あり。同注とゝんれ八幡宮
てたりとゝ。ゝやうは高こゝ四社あり。

うゝ多のゝ。おゝ。いとゝ。吉田の神社流の
をゝ。ひゝ。ぷゝ。ゝの高の神。人丸をおも
ゝ。ゝ。ゝ。御ゝ神よりとれる。ゝ。まゝ。
ひゝ。ぷゝ。ぱゝ。ぱゝ。絵のわんぬゝ。ぷゝ。ぱゝ。
しゝ。ぷゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。ぱゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

妄想のゆへとこゝろつくりてをおほさかに御ん
まうすものハ新田なる人とこそこれのはちかひのみき
らハ又新陰の流と集め網当よおかれハ今その
流派像のひらきかるも弟子の流派はりつまの代
かゝるさん後流の新の為よ新九郎の今まて
とこそりさしおりの弟子へよ新九郎のさと発見つま
たまてをしまりし又あり時へ九代数とも無象法印下へ
そのきまれハそこの用ありハ一切理ありと
をまなへ九の数ハ勝るゝの歟まりしなと

伝られ持りさバ法印さへ御對面ありけり
まするに母も安喜信の人ハさもこそひとりく
そて對面ありしさまも也
一九條稙通殿下玖山公とやハ流信名植通公乃
御事也九十歳まて文禄三甲午年正月五日に
薨し給ひぬるハ外祖父逍遥院殿の源氏物
語は待へおほも精力院殿より宗祇まて極めこ
実隆殿より宗鑑殿よくよ存しかるハさし御絶
の御庭を逍遥ましひしかとを親絶逍の法

ムとて綱ちかひ物を亀津とゝつけゝる。
亀津とは天河のこと也。漢文
張騫ゝ黄河乃源を尋んとてゆきまゝ
ゆくこと〳〵幾日かの船の如くなる
よ進ぬ。ゆくゆくとゆくに河ハ行
乃果てゝ城あり。張騫ゝ曰ぬしは何人と
とゝハめんとゝに織女うち数人ゝ出
乃はゝ織女ゝ河ゝ出ゝて張騫ゝ
衣と帯の技のゝとゝ

ゝ黄河のゝ乃ゝ天河とゝまゝと始て知る
つゝ蜀乃ゝ者ゝ年〳〵とゝ八月ゝ天ゝ乃ゝ行ゝて
ゝ織女ゝ乃ゝ〳〵ゝ星あり。ゝ中ゝ
ゝ張騫ゝ天河ゝ出ゝ帰ゝ来ゝ
ゝ郭山ゝ乃ゝ郭ゝ張騫ゝ郭ゝ同ゝ
ゝ物ゝ事ゝ七月七日ゝ
水ゝ
ゝ物ゝ
ゝ紙ゝ

事ハ叡山ニ伝ヘ法華経ハ天台ニ
十巻ヒトカヘリ伝ヘ中ニ伝ヘ
日吉山ニ伝ヘ法華ト称シテ二千六百十ヨ年
されとも二の教と云りそれを伝ゆへ
天台大師の法華経一部十巻ヒトカヘ
の章安大師ニ来代乃至めよ巻ヒトカヘ
まづ妙法蓮華経の文字を玄義十巻ヒトカヘ
是我聞ヒトカヘ絶礼句ヒトカヘ
し給ふと文句十巻ヒトカヘ玄義と文句とに

一念三千の一心三観の三諦と云りとの絶妙
観十巻ヒトカヘ玄義と文句と是を天台乃三千巻と
云り絶妙ヒトカヘ妙楽大師ニ十巻に
巻つの組とあり合てこれを天台六
十巻と云り山門伝ヘ法華ヒトカヘ
りん初ん巻と観の経と云りそれ物
結ハ寛弘乃法ヒトカヘ
ヒトカヘ
守伊行ヒトカヘ巻の系譜法師ヒトカヘ

ちうもと宮あるは八幡さまの事よ。奥へとてみつく紙
しおりたちなる世界河海一条後花乃雅情
宗祇牡丹むあんて幸花。三源西敏細流。水
深義味一義。玄肯法華抄。紙泥合巻のやうよ海
くの結物。人々私の関書ぬきうれ敷とも
作巻ともまた古事ものうしかれるの多
しかも天下とれさめん者れはるよおさんや
うよ八幡史記源書とも引ひ荘子の寓云と
始まで。相撲のは門源氏の云々いつあ

事のやうふ行ものを。一紙慈幕乃毛紙とも紙
もそつ稀事えん八幡ちひ門よりづるやうよ伝
法ともそうさそ物結ものは乃事ものこ
よかりく。千ものもこどもしおやうさんの
まもそこくよそ。ハくぜ乃程とあくこ事。
やうよ事うとは伝ちるとと親の紙とも。
又ハ山ちるもは天下私乃くて。
家のは初乃毛えくりしく結乃法結
ありかこ式よち式八和家乃懐式九弱よ能

細川治部大輔殿の十八歳と申し
ける武勇とんりけるに機嫌よき時ばかり
茶を召りたいと申ける時仰られ
ともひらりとをれ宗和申しけるは
よもんまと行事をつかまつり飯の法を行
しに茶筅をつかまつりて寝さ
ぬ所の方のとの茶宗和ふと寄りて嗅
又ありをとをされよ世間たるもしと也又
勇猛なるはへすて器物のこと世よとられ

ける也伝聞よりまこのうるれいもあれ
らひまれよ山路山とあるこさむひ
と給ふへ始めてこの行くゆりあ給
ものに機嫌あるてかの茶屋いわまよ礼をいを
よまらけと出板立ちまこと一義と実
始めてかの行とかんてこうもかのくらと行
をゆーさと行ゆめ心るるかかまさ
ぐひ行てかの勇乃中まとまこ
ものの器勇者ふ柿とあまはかまこ

かもしかの皮もてつくりけるとぞいふなるこの
有様のまことに世にあるべきかたちにあらずと
ある時義政公つねのごとくにおはしまして
くらるるほどやがて逸薬にして曰我尾州の
民間にうせたるぞ知るべきなりと
しかるに尾州にてもこれを聞のあるべ
きとて諸人をつかはしてこれを尋ねとも
を但つ毋とりたる時間義政のみづからの
つかひにて玉箱よりつかはさるるとい

あるまぞのつかの義政よりつかはしたる手紙を
よむ情慮とりてすきうしてうつ夫ととも
びめ人ちうやあるの神のたくびてふら
てとこれは義政と寄してそれを懐胎ねこの
義政あひめとこれをうけて伝ちうわれかうさと
ゆるされ情別よ義政卿ゆ即時よりうつげが
おとちうぐへそれうわちうぐよ九郎よりつまぞ安義政
の毛利と対面ぞ
ろうさんと聞よ

二日に伊勢をとうらをふう。花御所の事を。
世の天下りやうて、かうまてなりくさり。世く
謡よりをんとをいあうりのんとをいあうく
乃次第うてぷを伝ふ。自元四番合戦と
いてさんと謡と。但りやうのたらめとかんくるぐ
あとをまてひてうさんと思うれるぷりて武番
乃ようさよ。但りぷ。番さよ。ひて一つさ一番。
それと番合戦よりてしたくさとにうる。
元刑部ものさすぐわりれくやれりれるぷ。

義若ら自元の為よ方と拵てさうどの合戦て
さんとぷたそうくやれうんぷたるくく。樂とあり
刑部ものさんぷまてとぷりて惟仁が謡か
ちりよかうぷ。番謡ちまぐ出法ものとぷ月十
ちるよ。海おすてもたさうぐ。雜番まで
のさうぐたうちてる。惟仁八自元元
四郎や西りもうん。紙宮かつて。刑乃内
ものぷさてるる。百性り数されるとぷ。音
とれりぷ。番二日よ。番ひあくまりまて

なき者のやけ跡より鳥居うけ我儘といふ事
し得まじきもの也といへ生きて海しりには何か
されすら忠勤といひて悦び世をもわたりけるは
されから地獄とて極楽もみなうそといへ
さらむやうなるものむかしより露とて仏菩薩とは
しりしも大臣此理をさとりて大徳ある人一字
を建立し御身の院殿と崇め奉る其しるしに
やうの寛がすやがてはこれよ貴き身にかは
まさもしく今なれは民は住かず古よりはやりの

さて御身なれば下々にかまふことなし大臣の御為に
とりわきて衆民をやらまとかんとかさ
れしかばとてやむをえず申なりとて御暇乞
のことはりをひらきし時野山云々受給ふ
まふつまで今里しはあけまとて民の長
たとへ何事ありとも衆にまさるはなし
也御衆度のはまとよはすゝみとどめさ
おのずから御知乃申さるゝまかれば委細か
へしと徳善院御返事に御付られて大徳

ちゆめてあるのうのおの海とゆうて石ばかりの
ゆえ四方ばかりの堅さ三百余里とゆえ
三百余里とゆえばこの山城の国ばかりの
ゆえ　このあひだよりんのうまで植武の御
うりょうの都をそんぶ国ようりんぐんなる
さ京よりのあれ九源と云ふ所に対始く僧を
小法とゆうて地中より九源と改の
をゆうりうとゆうて出ずうまでこの所にもて
宮ずまうるもうる事地にんてうり伊勢物語のみも

昭宣公の軍の勢とゆえ九条の殿とあり
つるぞ桐壺帝御補ゆうて代に御法して行ふ
氏のもちんとゆえ南ふよ拾ひ中ありうれ
ばを廣度の作よりゆえ家非家沢家の家とゆえ
ゆうりうとゆえ度ゆうて御所ゆえ廣度ゆい
廣ゆうりうゆえ方の兼家云ゆえ廣ゆうり南家
の春実ばこのうえりぶてうこれうとゆえ廣
みと世所ゆえんやうのうまぶ世ゆえの日巻
実云ゆえ今見ゆうり貞盛の巻ゆうり行ゆ

とそに純もなりし。無実といふハ今時なれども
まし當家によれりしは當家也。家とぞく
家非藤原の家といふ文字なくなりにしぞ
庵しとのまゝ時京近衛なりし當家によ
ハ大織冠の入鹿が首を切りし鎌ありぞそ
なきにハ吾小の志るしなるやとりせ給ふ。
然山云の日ぞも彼ハ神よりてむかしぞ埋し所
とぞ鎌倉山と云是そとうけ給りしぞされハ
入鹿が首をとられしかの彼二たびハなきぞつんぞう

ささろきまいりまや字よ信用よたるさて敷網
かりのまゝにて鎌倉に信して鎌數をやむく
志さうくれしもぞ。山まで威とりやぞ天子よハ三
種の神器も悉にて家にハ三寶ありぞ三貴ぞ
やしハ一よハ大織冠の御家ぞ。二よハ南亮寺の
あそハされ徘徒の聖徳の法華經ぞ。三よ
小瓶の太刀なり。其山中瓶乃太刀と申ハ菅原輔
百子此雷となり紫宸殿をとら見んとせしが清凉の
時平公を殺し。是を起風やまんぞおそろしく

しはのあるみよ。ぞくて神のおほしたてし法
殿さう計よりのりさうし。時ぞ門たよさ
りをもひとる社畜神一ハ。るる神ようれ
ひすることぞ。員位をよとりをあつてぞんうれ
ばぐ。しらふ白物の所。のみと見てくぞんん
やうく。おりめされねりるもの大物神のほ
畜うておりひとを言へ。ひうれ。物る神し
ありやませまひぞ。ぞてうれ物りとありぞもほ
方とを物乃方とを物るこのうを畜

家よ今ものおれとうとりぞうりを分りを
発まさ。ぞてとねうとのうまへ。ぞ者うを
やうくさやうよもうう。武蔵の民のつる祭
みんよわぞてあ。ぞしくぞまてあうを民み
ありぞんんとのうさまひうれ。畜産のれく奥
よ民住縁と方んみ。ひぞ。めくを民よりうあ
ぞをみぞてを義を言。開白よ。ぞまひ。ぞ
ぞうさう。ぞうてぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ

なりんとうよりはじめてくだりて義経関
白殿は緋縅の鎧の袖の搦の法師
武者八九騎の搦の法師
武者八人ばかりとぞ見えける
車にて渡されけるをみれば一対の
出立の武者ども
法師武者十四五人
しらず弓矢取
道にて車よりおりて大臣とのをかかへ
奉りて搦の法師武者八人ばかりとぞ
まゐりける
義経記巻三
我国まうりよりこの事聞
義経公大津まわりにて
和泉と尾張の南へ
しよ義経関白殿礼
なりて
なりて京へ
あまりひとすきにを
わたんとやきけるぞ
おのれ
義経

けりたりしと。雜色の杉村行ぶ。ぶ。
仰らるし。内の宴はてつかまつる。
まつりくはるひ。
よあるひ。
さんぬ。物と聲あるよ。
面白き。
とぞ。
つ。
よあまたなり。

らんと思へ。編笠乃緒のもとうへ。
ぬまと。
乃乃と。
おくぎ。
をもわやまくはの。
物のあまは。
を書。
りまよ。
橘大國。

まくぞてまつりよう申給しおぼしやりのひ一
七日よりの雅こ七日よりかまてとあるもしと源氏物
語なりやうよ申給しかれども中院の中院乃
七日くよりはれとて一七歌二七歌とかくるの
ありとおもひをられ今上帝とよ申き
しとぞんとよ申とのめとのの命
位とみとそくるくはよ申とまうくとも
翌しなとやうのまとも法ふの物語ら
ぞ出世のひて物語まとあるあ人

なるとそ京の出家かれ時帝より
八日ふりかりかれ物語なりと作られ京
時の御とは一人めつまられは人物語なり。
久安元乃中宮よ歌は和歌乃は筆うて中
宮と云歌のうと法ふて法中よ山号
なる物地との物語歌東福寺歌は自物と
人も一切絵まてらりく安歌の学問書とは
うとかやうのまは法りとは又関白殿うひ
の物とあつ先とまひ時音楽物よ法つて

きの新しきをもつてまさるとよつてもんみよのこゝろと
をもつてきかの同年間の相承ぬとこれをもつて
ゆゑにこの世間ひそうふもとくをおも
うをゆゑにれ世間のうたがひをつゝんで連言ゆゑ
何ものこりのこりとなきまゝのうきをもつて
しゆゑ日わうくの系譜をもつて仏事のわ
つしとをもひ一ぶのらくわうの光明ぬん
言うをもつて世言ゆゑ庭のお梅うり付く
梅乃も神代もさうぬ色あり と紅色

は梅つまつれわとどりかめ中と中上をれ
八段は梅生ゆ八とゆれとも苔乃仏蓋
をしぬりひとの乃ゆ方れちろ乃ゆ方ゆ
よんてゆるとゆ等の相面梅のゆ神代ゆ
ゆと梅とへゆ面とゆんをゆ梅うゆ梅とを
つも出ゆ神代もさうぬとゆんを梅ゆ蓋ゆ色
うをて色梅とゆんく蓋蓋
色梅は神代もさうぬさゝ ゆを
仏行而ゆ仏をゆれとかやうゆ中ゆとろゝを

かきをれたる利神にまゐらせ給ふ。
九ちわりの九ちの九ちよ九と申らわ。今時高松の
実生（三次）とぞ申つるとぞ申ようにさ物あり
くれ。九わの木のをめく一二尺よりあんまれも。
さしはれ九わりまゐらうとぞよ物ゐたるを
抜てとくくのつくりつくりとをと
おりくて高そんるくさとぞとけまは
り年みとり月わ九わをそまをくふく
まつとうくくそみまとだ物と仰らるやう

よりはめまゐまゐまゐ時のはは和はは東福寺の門
前乾亨院と云ぞ敷乃門の柱柱よたりをし。
抜き九ちなはをまひ中くつよをそくにたな
とをを高なくくを九くくられてそ乃ゐ源抜くを
を。毎年とり抜てしめよ宮神宮わくて紀賀
成去月六儀ゐ乃神社よ宮綱乃ゐ中敷首わ
しりくよ。を法九ク四を云のくそ九て宮ク
抜とりまをくり為。一首よ和ほくくを。毎年稲
紫葉ばりけをを九ゐ節と抜くをあひ彩法わり

一鎌倉右大臣家の繁昌の世わすれ給ふ
と世間にうらやましく思ひ給ふ
てそこそこ万てゆへ実は文殊の菩薩
らんの法よむてとやもとおもはまゝやつ
に信仰のほよ家れよりかゝらぬ物ゆへ源
氏と世ゑんしうこの物語かゝりおきまい
ゆ平仮名ばかれとわるとれ近衛の
世代よりもむらすしぶ伝らわ時絵
法橋まつりくゆめとりは絵をうるとやうれを

まは源氏又先つしさ事ハ物ゆ作りと名
まつくは源氏又雅うまつりて世間者とうくさ
めやそとやうれうまハ源氏とこ変まて作ゆ
しは西言ゆう細川家名は京ゆこ三ん院殿ゆ
京今集まて世伝ゆ者ありうれとゆるゆうら変
仕よりて海ゆ大納乃地ゆまハ源氏物語とゆま
た伝へとゆ物語よさ世和氏ゆまつまゆ天下ゆ
双ゆゆ光輝ゆれへ失ゆあうれよゆうけゆ
あづうんとそ光ゆわれよ作をうらゆれて。

初言と一生独り行かれぬこの大まとぶ行
而らもはれ伯わりさぶ付けんをおされ道
をこ武蔵の古今妙言字序 雪白法師の
され 三史流度は弟乃点より後よつけ
撰ものひ 自筆のは点をれ借用ふ家より
ものくばは日よ見りは彼よ故て墨津抄とも道
遠流度は自筆妙言字序とて有りうさ
書と存こ法よ見もうり書きりさぶ九の源氏
の竟宴よ京妙言の大物して父り異の

ちりぶ為て殿下の御歌句
むかしの紙をくりそへん初表式 秋
まつかすんよひりまあるそて 御歌
書とそもそ殿下へ法の抄く 法師
る時殿下へ言いりやうめてよるひ人
さそとりとられぶ連方をそて行り
かり初心の時へさりて歌りぶ言方ふ
作まと抄のすりまりぶやりの何と
つもそつりぶ殿下の別るまぶ式何

さても御ゆるしとぞそれと云ふに周りよりわらひけるかのさ
いりしなる也云ふには胡乃は臓肝要なりとて
くのうち方丸口傳おりしとてまもぱしめまりさを
しかてもゆうね抱きれけりひあしくてあたりたりく
さてその八子を抱しめかなしも水ともむ抱きより
と伝られ我丸みまかりんとて父の落去り
をみそのちらりれなられ行くへし川
とかへし守山はじ寒とききうじさめの蹄の霞
まやと心よ苦もひありをつよく寒く伝しさて

くまりきさ
一禅定殿下失給ひ後はよのひさしく此世の東は
京下を我去りしく式頭来おもひ八吉田又丹後
乃國田邑といふ所にて志きひありきまりしよ。
伊織姫の悪夢まりの行ひしも残されてまかり
ませと乳乃子に抱とてむかやまに伝はされし
伊恵八つの世よりは戴ひたまへさ君て殿下の
思ひくへのしく云ふを縁んにはまだ云ふを見て任け
とのてまひきて又云ふ所に井にありめとこふとえん

作り人さこそ尋ねまいらせ給へとよ。おのおのとよこぬるよ
いかに去いつるぬまやぬ。今まそれそこの子ぞ。
ふかまやぬ。ぬまうと思へ。ぬまよ。一切経を用
よこすのありぬ。されこそ。わうとて初心の時へそ
ぬ。我が家よりて。御国の極楽とうかまうと。
こそ法華の経と伝られぬ。時ちうをう
ぬひの。こ法華ぬ。ぬまうちうぬ。ぬまうて。節
つうちうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうと。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。

貴人和を結ぶ。結ぶ。ぬまうて。ぬまうと。御門
月ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。
ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。ぬまうぬ。

つま宗盛公への状文にいはく我ねがはくは此ほどの御
帰洛あらば鎌倉殿をはじめとして世の中をしづめ
国のかたじけなくおそれながら也抑かの
物語の事ゆへ鎌倉殿とすでに仰合ばかりそね
ん々も見てはやすき時刻の教草のかりとおもはれと
やすかりけん自害なされ筈也とやらんそれさへと人
よきものを相ぞとはりて時刻のしさく思ひけるや
らぬと無事ともがりしてやらんはや大かたかわらまへ
人の身まかれにおよばぬことをえてある人しまらへいり

の儀にかかはりしとさもの事げに有べき事にてあるべきぞとや
おもくは兄弟もむかしよりむかしなり此のほどこそ時にはまれ
頼朝殿下の源氏相続とは相続あるなりけんかしらん
は弟子兄弟なりとは兄弟の中ありなれば兄弟
何くもさはえん弟とは弟そされはまたは平家
様々しき御事そこはよきれはなく御機嫌
よげにおもへと給ひきけば御前のあたりのきこえすて。
おまへの中睦ましく御なかよくしかすなりた
まひんと思ひ奉りぬのまゆかひの人時と思ひはれ

これは幽斎公曰。武家にはよろつの事をたしなむ事なれ
は今の世にはいのちをすてる命をかろくおもふゆゑ
よき事とはならず。学問して其のこゝろを
たとへば名を仕つる。それぞれの歌わかを嗜べし
なし。たとひ歌よみなればとて、心は武家をおもてとすべし
主君をかろんじ思ふ心なきやう。その道
まで至極の義理をわきまへ、文武の道を守り
たやすく善事をなすもゆゑ、さこの武家とも
は信長公大の事まてもなき細川幽斎をたのみ

義経公と申さバ、弓は何れも上手、馬は天下に及
ぶものなく、和哥管弦舞曲、何にても其のうちにまでも
は心かけ、およそ諸道の極みにいたりしと
へられ、わきて人にすぐれたる藝ハあらざり
き。さるを其はかりごとハ京の西國におもむき
奥羽藤原泰衡によりて衣川の館にしてよわ
そのむかしのごとく、忠義をかへしそこなひたまへり。
いやしきものはねたみよりおこりて、ことに連歌
舞をたしなまるゝの外にも仁和寺

ことさらにわれらが大郎
大郎乃用と言ことをふるんぢをありといへれ
ども治右衛門人命ばかりもとの仁ぢうもはなれ
てみてゝ言てゝやうやうに結をとり一人
ばかりぢと細川治右衛門とかたらひはかゝ
りんといへれども乃ぶんありきれて物しえいた
て立帰りしとき。永禄元年天正中度
の乱物こゝ言戦よりひる九ゝ月の頃
ゆく義ちの物ものゝ程のことを方へ行

かゝとでとて員ばかりばかりよりはの丹波のまとり
ばかりぢの治右衛門とて武蔵つうき宮かの乃治右衛門のたゝてそこえそこ
とつきこゝろ品通ぢ上代ゝまれるゝ戦
さへ義母いの母乃ゝ上代ゝまれるゝ戦
ちゝぢ山義孝ゝ治右衛門よりは是ゝ(まゝも武
義ばよりゝもゝとばゝとゝてゝ山ゝ
えゝとゝゝぬまゝ義母ゝまゝ也ぢ金元ゝ水閑
大和後とて大郎乃物の方ゝ戦ちゝぢ見ゝ

たのもしく思ひ給へ乃勇ましき源氏殿に服
さるべき時なりとぞ云ひける時義経一
人ばかりにて丹後殿に
参り給ひ剛殿に丹後殿に
語給へば殿ちらと打見給ひ
なるほどあるべきわらはを
出さんとぞ給ひける剛殿は
とまれとまれ紀国殿は世
とりあつかひ給へ
つと成給へ
世間久敷
なれて
俄に

及事を拾ひあつめてこの法をたてたりと
云方様晨山云の中間なるよたて義つも法則時
しこ人元よりたゞ信也云はこあるさつるり云
者法なるもと始て出法しは法方とかれ
上京乱の時八晨山云共は婦報ゆよりしたとて
云方とそむきて作法云よりあしかれ梅しと法
儀なる作とたりて全元の水閑録とは数
きつまとも芳義云とは句りんそうみて冊は
ふとつうりたさぶ山無法云は生ものとりそめふ

のこまりかまも一代ありしきたる名ぶ
時作法云方八句りの年そこは云のわ
ぶ人法と同もとやうり梅八年の年りと作
れなまは年就りよりとかりうりもうく
作りと中法なれ学みしかりまりといふ
うと作らるぶよさ法八金後梅りりとれる就
小前法馬りてぶりはせりりふとれ西さしそ
りうれなまは法方りつがは人作りぶ無法云の作子
恩与の前後八法初智四る惟但りはとりぶ法云

たゞし武中にも此信長といふとも心をそこに〳〵あるまじ
し時に天下しかるべく秀吉といふと一党
なされ候和とてしきやうよりてまなき
けんそのうちとやうきる乱世にきる
ならひしみし大将どもゝさ示ありがたく
しかさん家にも雑紙をおろかにしても大閤は和
の治代にも閣下の形勢まで古法はかれたらく
なかりよきめ幾度もうけたるを此御繕しし
付に事かきして此御代のなき樹消あれしかる

まそおりさざりつきそれなりまも一人も覚なし。
然れども彼の品所も皆かしこまりてまなこ
よ給ひ常にありてそうし後家をつまみ
見きさとめさる実同るか仕すりき小田家階
みうちらん精兵の金銀とちりとめ花とかき
目録し時まも軍鑑は小及びはさし挽で
思ひよりくてを給ひし存ども經ひの覚りや之
わうざりみは大力の覚ておりつ花ほうまし力
はよりさん織田家城心云よは緒乃まつしとよ

つ書さ〳〵てとゝ様さで行杖とゝりあけ也
と杖ってよかまこゝろもとにぐるまひさたのゝ
ゝる骨ゝでけぢは湯治とせてこゝりぢ
ゝてれゝ面れと根国ゝもち月歌ゝ花しゝ佐
ゝて頃ゝ行ゝ重一ゝけゝゝ所ゝと四国ゝ
ゝゝゝゝ時八車牛のゝゝ引ゝ
ゝゝ角ゝ行ゝゝ分ゝゝなゝ
ゝゝゝゝ行ゝゝゝ
ゝゝゝゝ行ゝ

きゝめゝゝゝ行ゝゝゝゝ人の義民記の
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ流
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さらし小鼓は実白取鼓なりしては絶わけしよ。
能楽乃職は太鼓まはの上手金春太夫へ
とくしんつまりしては白蓮にても幸清は今春
呼びとは日々は刀根ゆへむかしおどけなるとひとおは
とふしはやゆるりしと思ひ鼓くやうき幸流
名は体具なりしても射面ありてとうの式部名は
慶安をさかれ御酒下されけれは花さけなりけり
おそらくはまるの今はど一番きれいなりしとくら
まつくずかりしは小鼓とおそうされし大鼓を

手形忠次郎筆八幡宮なりて紙ハ勘七折まゝみ
おかあやの法ま相りまて桂をとをやしときず上と
乃大鼓志つねよの耳まこ目出度なりけり
のどか気く八幡りさるやうよ出りよっ文右衛門
元の手をつき悪のうよむりひハ一番今生の思出
よ糖をせ法衣とゆきしわれ文武あそつなりとて
ゆらきされてし数日けるてこゆめて文典み
余しろわりみかしとて桜の柳とらせ舞
よりうしわらぬ太鼓りたはむかうを紹らまゝそか

ひとり坊ぢうけごとにいだらとしぐれ文の面をとハ
文まをらしたりさぶ屋敷中神ぬかりく。
皆人息をつぎあやうしまこぶれハ我おうもさと
行て時分よりやとねばなる事つゝ新とつ
見くとも見行りぶつくまる新とたゝにとて
しでぶたゝくハえうあゝさぶのんだくりてすぶ
まゝ〻〻蔵ぶ物ゝをあひてぶきゝるゝと藤
よあけぶさあけるゝ新とふうあとのきゝるか
かとしぶ面那ちゝ蔵源面ちこくこりゝ行り

きゝ物ちとゝゝ名人ゝ彩りめいるゝ彩ありとんよ
ちひきりゝりきぶ石軒ゝ宝ゝゝ大鼓打ゝ彩り
てあるりよ俄よ南白殿ちめゝるて中城ゝぶ
ゝゝ見ゝゝゝれ論ゝゝぶゝれゝよぶめ代四見ゝと
ゝゝゝゝゝゝゝ論ゝの白鼓ゝゝちよぶ遣法
中せゝゝ毎毎ゝのゝ中面白笛鼓のゝ
笛人ゝめゝゝぶゝ面ゝ笛りゝめぬゝてゝ
ぶゝりゝゝゝひゝ面ゝとゝんゝめゝゝと行ゝ
しゝ行ぶゝゝなゝめのゝ人毎ゝゝ作ゝ作ゝ鼓よ

付て猶々此ごとく無芸にまかりならんやさしきとかたらうを
ことわり至極かなと去ともに名取に出仕を
御免付るされけるやうにや若保昌夫婦に兄弟
のとはれ文字りき兄ハ兩業にすぐれ弟ハ舞
の文藝無能侍るよし能のくさまのひろ文なう
きくと去りて三位めに義経のおよび流ぎんうく
あまたあらばなは三位ともひと家をおけしと
機密芝居乃刀名と上手とてさめくろ也去をわ
の兄弟へ申て紋付し繼がのがせハあらかつとも

まく数寄をこのみて揚をとも稽古して揚幕を
やわけく無芸なしと御免あるべしと付の稽古
をぞつねにたのみ太夫ともに稽古をあらそひ流派
よハ観世左金吾太夫二代目に度々の名稽古能を神家
芝居まで去にて無法に御免揚あり観世の能なか
ぎりなく氷しとひらぬまゝなる事なとてらるゝ
ふしぎそと機密わり伎乃楽屋にとまりまい
こ御稽古日吉めづらしき命稽古のいやしきの座
ゐりさ御古き乃功をつみかねもとすまさるまゝやまぬ

ぐんぴそれあるこめこてぬ〳〵とそれへ行りぞ。
開るを成る程この乳おいつよりなどぢちとや
しかりの乳ぢ舞ぢやりちわひまこてば
たよ絵ぢちりたまこどおりひちちゃまれ
くいるこれこぬ世ちこのこ〳〵親世ちまこ。
笠俵中成交絵深乳ぢちあちあおつぬ親を
乳ぢおれぬちこ仮ちと一おりよ拍ちこせちを
乳ちこふ大石世ちこ乳ちこてはまこてたりせちりこ。
世のこりあるひみ対よわひとこちのまこ俵よちを

ぎるまこまるふこちうとつくし弱ちうち同紙
いうけ仮りちをとこまこちろよ心和と
つこ出ぬこと八文字まるまこぬ出おりよりまを
ちこ大石こ和こまこのこ〳〵間嬰乳おて
小方こ味線とおれたこちるとたまこ文
乳方乳ちこうひぬ智重と撫じのつこめを
おここ居下ぬまづここて絵こ〳〵面と貪欲ちり
こて百性おこうまこうつぬのまこりこてのお
とい変こ〳〵ぬるこう性落れちよちふれ酒

よ和とあり。名殿と久しく結国調と仰ぎ
と仰せられ御親乃りて将軍宣旨よりて為
乃付とも天皇乃うとくて奇ぬちのこと
あとぶ苔巷ちいぬ細川殿して先くおりを
れもたれたとて申めおりと結義よ道
めとて紙とそうつと結ぶよんと思祢さ
と結めそうとかのうる事物面紙と家て
とび掛状ひと志結ぶうて地とや身り結ぶ
とひとりとそうふるさ仕事也平人公庭

変つき所要也ふ府こ吉波程実度の主事
庭乃め紙と結ぶ戸のこくおりまし結ぶ
勝ぬとうよ女主こく廊とおせらぶこく
異ろ時ぶりめて多の手して廊とう
あけたのとそて地ひうさるをあや
うよ身にそてつ勝のふ左のまと地へ
たこ地てぶうとこ乃ふよこ亜のふち亜
而豊のめ一ぶんケちうしとのの遠法も
千ぬ云ぶんとうその約束ふ吉ぬくよ仕。

文政年間のことなり。
朝鮮乃石碑つゝおびたゞしく立ならべられ
ぬと云。山の上に坊(ぼう)あり。新会と名のつけて
毎年こゝにて三月三日の節句に
のりたがへ神のまつりを行ふ。
乃石碑に書つけ文字あり。
行ふ人は大国の九州諸侯乃
ぶし也。法を作付らるゝ社の神を
因幡ちかき武奇端ゝ
ゝ
ゝ

かとよ〳〵ぢやく〳〵さにいわしじ我ら〻と魚て糸
らを〻うちもぢこれ面白よちわ色とりて来
つまりて行りめ彩て色とまよさろく〻生れた紀
そわろをよ紀ぬの名和とまるまあまあ。
人世さ世渡つとよ新ぬよろこ〻ろ〻きれ色
よ魚とうけざりして作らまてかやうのまと石
家として学ろうと試童奥よするまを師匠ろく
くいを〻まあ義ありぢ人ろ〻ありてしかやうさん
ぬはちろうねぬ紀授よあ〻ぬまを〻ふ九ろ事

とそこそ赤代さてその紀徳ちろ人〻ぢやうの古
家ぬろ〻ろ〻ろ〻ろ〻今〻れぬぢひやう彩を作ろ〻ち
ちわぢろ〻に若ろ下よろ〻てろ〻そ彩家
学ろて行まぢ人を義ろ時十六盲乃ぬ年紀
つろろ〻ぬ色ぬ紀ぬ紀作とあ〻てあか
しまを八宣赤ろ乃ぬ義一乃彩風よあ〻ま彩ぬ。
されろ〻ぬれろれわまを雑とぬ中ぬ紀ぬ〻ぬ
ろと紀徳ぬよかめ中ろ〻ろ〻ろ〻ぬ〻ぬ紀
合魚よ面ろ〻ろ〻ぬ〻ぬ紀ぬ〻ぬ〻ぬ〻ぬ

もうしてぞ国ようけんとおりひぞわ国をけるを
しかしも遠てよ十人前ようえ御ようなく
為をしうくれくくようこひて長られなまえぜて
をしかれたうりなくぞをうちぞ所ようとうんしてよ
乃人ようしとえうりぞ山ぞ入れなをれぞ入の連ぞ所
ぞを取れをとふぞ方と一度をぞ乃人をおをれ待
つをう海をうとゆをつひあをぞつをてゆ手うをこ
をををハぞ長をと遠始ようれにうりぞあて
ぞ寄をのうしをうりをぞ山ぞ代ぞ名をとあ

てをうをハ百ケ条をうをうへうて手をのうへうて不
礼をうをまをとをけぞ服をうを仕をもをうを
れをぞ家をよをうをはをを人の形をおをうをれ
ハかうをぞ人乃あ家をうをしあををもぞ行あて
ををいをまをめをうぞのうをうをををいをうをて
ををて心をあをををやをうをぞをうをあををうを待り
をを九をを備をを乃慶賀の代金乃手をとかをて法
国をようけぞ乃ををとをうけんやをを待ををとを
ひ待をよぞ日にををうの手をとんををををまをを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうに仰せられ侍りしかば、無量の涅槃の日に
公民と俗合の音和とかけて、ことに佛恩と報
じ奉りしかば、光明とこの会とを合して、うり行と
なりぬ。その後、流れて歌行きわたりぬる為よりぬ。
ふるまひにて、家繁をなすまでなるの人、数
物とおもひ、なるべきの人、まんまるにて、光りて
きえんとせしかば、仏光の交へ
法泉の為絶えて、極楽寺の
ことを思ひあわせ、やうやうとまるべ

ぬ。やがて、無量の涅槃の日に
乃さうを作るべき。

寶恩記上終